

## 外国人親子と共につくる「多文化子ども食堂」の実践

唐木澤みどり (学習院大学)

### 1. 背景と目的

在住外国人の増加に伴い、外国人親が日本で子育てをすることの困難や外国人親子への支援の必要性、支援ネットワークの不十分さ等が指摘されている(南野 2017、横浜市国際交流協会 2017 他)。発表者が活動する地域も在住外国人の増加により、外国人親子への支援の不足が課題となっている。そこで、地域に溶け込むことが難しい外国人親子も参加しやすく、相互理解につながる実践として、「多文化子ども食堂」の実践を振り返り、成果と課題を明らかにすることを通して、今後の実践の改善に結び付けることを目的とする。

### 2. 実践の概要

「多文化子ども食堂」は、地域に暮らす子どもと親の支援のために多様な活動を行う NPO (以下「NPO」) により計画された。同じ地域の「多文化ネット」(仮称)のメンバーも、内容検討、チラシ翻訳等の準備段階から、当日の運営の手伝い等で協力した。「多文化ネット」は外国につながる子どもの支援者が集う緩やかなネットワークで、「NPO」もメンバーとなっている。発表者は「NPO」のボランティアであり、「多文化ネット」のメンバーとして本実践全てに参加した。

「多文化子ども食堂」は、食を通じて相手の文化を知り、交流を通じて今後の活動のヒントを得ることを目的として、2019年6月から11月までの間に、ネパール、フィリピン、中国の各料理で計3回行われた。各回は、学習支援教室等の「NPO」の活動の中でつながりをもった外国人親を中心にその国の料理を作り(1.料理作り)、親子や支援者、チラシ等を見た関心のある人たちで共に食事をし(2.食事会)、参加者で協力して片付けをした後、大人と子どもに分かれて交流した(3.交流会)。

3回の活動の主な流れと内容やそのときの様子は以下の表のとおりである。

	ネパール子ども食堂	フィリピン子ども食堂	チャイナ子ども食堂
参加者	ネパール人 親6人、子13人 その他 大人18人 計37人	フィリピン人 親4人、子8人 その他 大人25人 子7人 計44人	中国人 親5人、子9人 その他 大人10人、子6人 計30人
1. 料理作り	<b>メニュー</b> : カレー、アチャル(サラダ)、ライス、ラッシー <b>様子</b> : 料理はネパール人親中心で、子どもは料理や食事準備を手伝う。・ネパール語が飛び交う。・今回のためにカレーは香辛料から作っていることや仕事を休んで来たことなど伝えられる。・普段おとなしく日本語があまりできないAちゃんが生き生きと手伝い、材料や作り方をジェスチャーを交えて一生懸命伝えてくれた。	<b>メニュー</b> : シニガンスープ、揚げ春巻き、大根サラダ、プリン <b>様子</b> : 親同士はタガログ語も交えながら話し、手伝う支援者たちには日本語で、材料の切り方の見本を見せるなど優しく教えてくれた。・スープや揚げ春巻きに合う他の材料を覚えてくれたり、家庭で作るときの家族の好みなど教えてくれた。・日本ではフィリピン料理のお店がほとんどないことを残念そうに話していた。・材料が足りなくなり子どもが家まで取りに行ってくれた。	<b>メニュー</b> : 水餃子、焼き餃子 <b>様子</b> : 餃子の具や作り方について話し合い、中国式、日本式の2種類の餃子をそれぞれ作るようになった。・同じ材料でも使い方の違いに戸惑いがあった(生姜は餃子の具ではなく餃子をゆでるお湯に入れる等)・中国人親からの提案で、水餃子だけでなく焼き餃子も作った。・手伝いの支援者らは慣れない皮作りに苦戦し、小さい子の面倒を見ながら遊んでいた子どもたちにも手伝ってもらった。
2. 食事会	<b>説明</b> 日本語が不得手な親に代わり、高校生Bちゃんが料理の	<b>説明</b> フィリピン人親が料理の説明。食べ方等も教えてくれた。	<b>説明</b> 中国人親が料理の説明。 <b>様子</b> フィリピン料理と違い、餃

	<p>説明。普段は手で食べているので今日はみんなも手で食べてみてほしいと呼びかけた。</p> <p>様子。子どもたちは途中でお代わりを勧めたり率先して片付けをするなど学習支援教室とは異なるしっかりした様子が見られた。</p>	<p>様子。フィリピン料理に親しみのない人も多く、参加者は説明を熱心に聞いていた。普段あまり話したことがないCちゃんは、家でよく食べる好きなフィリピン料理やフィリピンの通貨であるペソの為替レートなど、フィリピンの情報をたくさん話してくれた。</p>	<p>子は日本人参加者にもなじみがあるため、小さい子どもたちも含めて皆が喜んで食べていた。日本人同士でもつけだれの好みが違うことや、餃子の具の材料の違いがあること等、食べ方や材料などの情報交換をしながら食べていた。</p>
3. 交流会 (大人)	<p>言語。ほとんどの親は日本語では十分伝えられないため、日本語が堪能な親が通訳しながら、行った。</p> <p>内容。親からは、日本の環境の良さ、NPO等の子どもの支援への感謝、親としても子どもの進路をサポートしたい気持ち、情報不足(進路情報等)への不安等が語られた。</p>	<p>言語。聞き返しや確認をしながら主に日本語で行い、親同士はタガログ語も交えながら話した。</p> <p>内容。親からは、家庭や近所のサポートの有無、宿題などの子どもの教育への心配、親自身の日本語学習の希望(敬語、漢字等)、同国人とのつながりなどが語られた。</p>	<p>言語。主に日本語で話し合ったが、日本語がわからない場合はわかる親が通訳し、親同士は中国語を交えながらやり取りを行った。</p> <p>内容。中国人コミュニティの存在(知らない、参加していない等)、子どもの教育(習慣の違い、日本語の問題等)、日本の教育への肯定的評価等が語られた。</p>

3 回の実践に共通する内容や様子は以下のとおりである。料理作りでは、外国人親から作り方だけでなく、自身の国の料理への思いを聞くことができた。手伝ってくれた子どもたちは学習支援教室等で見せる姿とは異なり、自身の育った文化への愛着や誇りを伝えてくれた。食事会では、料理を担当した親や代わりに子どもから料理の説明があり、その後、料理の感想や情報を交換しながら楽しく食事をした。交流会では、外国人親とは茶菓を囲んだ和やかな雰囲気の中で、日本での生活、子育てについて意見を聞き、学校や進学等の情報交換を行った。外国人親が日本語で伝えられないときは、他の親が通訳しながら話し合った。

### 3. 結果と考察

本実践は、外国人親を中心として料理を共に作り、共に食べるという点、交流会でも参加者が通訳することで疎通が可能な点等から、日本語によるコミュニケーションの負担が少なく、外国人親子にも参加しやすく、相互理解につながる活動だったと考えられる。実践を通して、親の思いや子どもが生活の中で学ぶ様子がわかり、今後の活動へのヒントが得られた。例えば教育情報不足への不安の声に対し、進学説明会の開催等成果があった。日本語への不安や学習意欲にも触れることができ、外国人親から今後の実践の継続への希望も多かった。

課題として、料理を作って食べるということばに頼らなくても可能な実践が中心となっている点、やりとりが口頭に限られている点から、相互理解が十分であったかの検討が必要であろう。より相互理解を深めるために、準備段階からの外国人親の主体的な参加や、料理に関する情報等を予め作成して当日配布するなど、多様なやりとりが生まれるための工夫、さらに外国人親子にとっての日本語を学ぶ場としての機能も含めた工夫を今後検討したい。

#### 【引用文献】

南野奈津子(2017)「移住外国人女性の子育て困難とサポートネットワークに関する研究」『社会福祉学評論』第18号：1-11

横浜市国際交流協会 (2017)『横浜で生活する就学前の外国人親子のための日本語学習支援・子育て支援調査報告書』[https://bbe5b19d-cbe8-4096-b5ea-c4551b7e256b.filesusr.com/ugd/2a2254\\_985f14e405f54e8895bbeb0877e83a26.pdf](https://bbe5b19d-cbe8-4096-b5ea-c4551b7e256b.filesusr.com/ugd/2a2254_985f14e405f54e8895bbeb0877e83a26.pdf)(2020年2月24日閲覧)